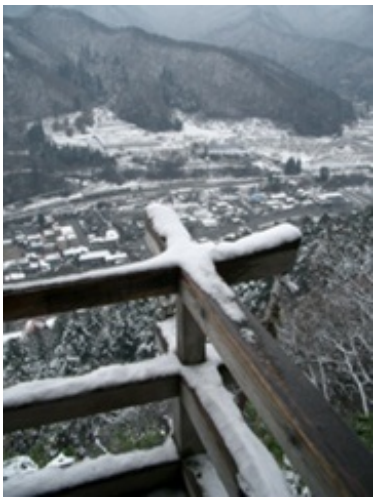
窓・・・南海部　覚悟

【山寺・哀歌】



矩形のファインダーの母娘の間に、見慣れぬものが在りました。
「あっ!?・・・これ、この子の父親です。」
渡されたカメラを構えたまま、怪訝な顔の私を見て、母親は慌てて答えました。
「去年、事故で亡くなりました。家族の思い出の場所ですから・・・一緒に行こうねって、遺影を持って来ちゃいました。３人一緒に撮ってくれますか？」
アングルを変えて３枚撮った赤いコンパクトカメラを返しながら、「地元の方ですか？」と訊いてみました。
「東京です、夫の出身が山形でしたので、ここにはよく・・・。」
「ーーじゃ、お穣ちゃんはパパと何度も登ってきたんだ。」
「そうよ！パパもそうやって写真撮ってくれたのよーーでも、死んじゃった。」
娘がそう言うと、母はその横にしゃがみ込み、長い髪の上から娘をやさしく抱きしめます。

とりたてて若く美しいと言うわけではない、其れなりの歴史をその容姿に刻み込んでいますが、寒さに赤らんだ透明な頬は、娘の其れと同様、周囲に一層鮮やかでした。
眺望に向き直ると、眼下の白い谷に向かって、母娘共々両手を合わせ一心に祈ります。
静寂が辺りを包み込み、空になった私の心に、あの哀しい唄がながれて来ました。

谷を渡る白い風になって
雪を溶かす黒い河になって
遠い思い出がふたりを哀しく包み込む
ごめんね、何も話せなくて
ごめんね、一緒に歩けなくて
冷たい 雪風がまた吹いてきたら
必ず僕がよりそうから
きっとふたりを暖めるから

雲を透す陽の柱になって
谷間にゆらぐ陽炎になって
やさしい温もりがふたりの記憶を呼び覚ます
ごめんね、抱きしめられなくて
ごめんね、一緒に笑えなくて
冷たい雪風がまた吹いてきたら
必ず僕がよりそうから
きっとふたりを暖めるから

冷たくて、寒くて、居た堪れなくなって、何も言わずに五大堂の坂道を駆け下りました。
山形立石寺五大堂での、寒く哀しい思い出です・・・・・・。

【セピアの記憶】

尾道は、何処に迷い込んでも、セピア・・・です。
有名な映画監督に云われるまでも無く、昔からずっと・・・セピアです。
駅から歩いて踏切を渡り、小学校の校庭に沿って坂道を登り、廃墟となったお城の足元を廻ってホテルの前を通り過ぎ、本邦を代表する建築家設計の美術館を後にして、公園の小路を通り抜けると、ロープウェイ山頂駅の展望台へ出ます。
眼下はたゆたう尾道水道、夕暮れの心地よい潮風に身を任すとき、訊きなれたあの詩が心を満たします。

潮風渉る水路の端に
ふたつ重ねて橋を架け
行き交う渡船も物憂げに
あなたの鼓動を呼び覚ます
ああーーあのとき私は泣いていた、別れの言葉の冷たさに
尾道、セピアの瀬戸渡し・・・・・・。

石段伝う小路の奥の
軒を重ねた瓦屋根
過ぎ去る列車が哀しく啼いて
あなたの気配を呼び寄せる
ああーー今は墓標が語るだけ、別れの心の優しさを
尾道、セピアの袋坂・・・・・・。

ロープウェイを降りて振り返ると、石垣の上の猫と目が合いました。
猫の鳴き声もまた・・・・・・セピアでした。

【時雨の疏水径】

桜（はな）の季節の終わりに、京都洛東疏水径、通称哲学の道を散策したことがあります。
南禅寺水路閣を出発し、永観堂・霊鑑寺・安楽寺と巡って、疏水沿いの桜を愉しみながら、北へ足を進めると――。
心地よいあの歌声が、春時雨の雨音を鎮めるように、耳もとに囁いてきました。

比叡時雨に追い詰められて
　茶店の庇に雨宿り
　思わせぶりに暖簾が揺れて
　店内（なか）の気配が気にかかる
　あなたの居ない京の町・・・・
　一人ぼっちの京の径・・・・・

　水の流れに歩幅をあわせ
　桜の花弁を追いかける
　息を切らせて甘える肩を
　優しく支えてくれた腕
　あなたの眠る京の町・・・・
　一人ぼっちの京の径・・・・

　風に漂う枝垂れの桜（はな）も
　雨に濡れ散る疏水径

法然院から、銀閣へ廻り込む頃には雨も霧となって、疏水の桜を一層しっとり潤していました。

【魂の出口】

人の魂をのせ、列島を東から西へ吹き抜ける、一陣の風があります。
春に吹く東風――東風（こち）です。
いったい幾人の魂が、この風に乗って、西の海に消えていったことでしょうか・・・・・・。
やがて私の命も、ひとつの魂となって、この風に乗るのでしょうか・・・・・・。
人はこの風に想いを寄せ、この風を追って西に旅立ちます。
列島の最西端、長崎の海で人の想いは尽きます――そしてそこは、風に乗った魂の出口なのです。

ヒョウ、ヒョウ、ピ～
ヒョウ、ヒョウ、ピ～
車窓に東風（こち）が啼いている
ヒョウ、ヒョウ、ピ～
ヒョウ、ヒョウ、ピ～
世俗のころもを脱ぎ捨てながら、列車は西へひた走る
あなたを追って
あなたを追って
肥前長崎旅路の先は、この世の未練の終着駅（ターミナル）

ヒョウ、ヒョウ、ピ～
ヒョウ、ヒョウ、ピ～
人の想いが黄昏る
ヒョウ、ヒョウ、ピ～
ヒョウ、ヒョウ、ピ～
潮風通う汀に立てば、追えぬ命がもどかしい
あなたが消える
あなたが消える
肥前長崎行き着く果ては、冥土の渡しの船着き場

ヒョウ、ヒョウ、ピ～
ヒョウ、ヒョウ、ピ～
肥前長崎祈りの海は、想いを繋ぐ茜色
肥前長崎祈りの海は、心の絆の茜色

幕府天領の歴史的背景のもと、穏やかで上品な風土の上に、原爆の災禍が一種独特のもの哀しさを、この街に加味しています。
だからきっと――坂道を吹き通るこの街の東風（こち）は、ヒョウ、ヒョウ、ピ～と寂しげに啼くのです。

【 窓 】

現代の股旅を標榜する私にとって、「窓」とは、ある意味特別な存在です。

ひとり、早朝の海を見下ろすホテル客室の窓・・・・。
思い出の闇が、家族のぬくもりを映し出す、旧型客車のガラス窓・・・・。
１００系新幹線、友人とビールを酌み交わす、２階レストランの巨大な窓・・・・。
５８３系寝台特急、最上段の覗き窓・・・。
２４系客車B寝台ソロ、２階ベッドに被さるアール窓・・・・。
月明かりの路地、こぼれる人の笑い声、思わず見上げる石垣の先・・・・どこかの家族団らんの窓。

旅に出て、住人と出会い、言葉を交わし、意気投合して酒を飲み、時には共に歓喜して泪をながし・・・・。
そんなこんなが重なって、繰り返し通うようになり、彼岸の境が曖昧になって入り浸っても、そこは旅人ーー何があっても当事者たり得ない宿命を背負います。
初めて渡った北海道、釧路の漁港で漁師と酌み交わしたワンカップの薫り、焼いたタラバの甘味、地平の果てまでうねるジャガイモ畑、赤いサイロの庭先で、偶々手伝った農作業・・・・きっとそれらも、旅人にとっては窓枠の向こうの情景に違いないのです。

窓の向こうの情景に、拘束されない気安さの担保があってはじめて、人々は旅を楽しめるのでしょう・・・・。
住人にとっての、掛替えの無い様々な情景に、無理やり踏み込むことが旅だとは思いません。
がーーしかし、旅人の想いが窓を突き破り、当事者となって向こうの情景を左右することも、偶にはあるのです。
そんな時、旅人は、断ち切りがたい未練と共に、自らの境遇を悔やむのです。

夜の街、瞬く列車の窓明かり
夜の街、名残惜しげに通り去る

あなたが降りたあの駅も
あなたと暮らしたあの部屋も
今は同じ窓の中

そうよ、あなたは旅人だから

窓の向こうの旅人だから

あなたが過したこの街は
あなたに合わせて変わったわ
ここで暮らすと云ったじゃない
一緒に暮らすと云ったじゃない

そうよ、あなたは旅人だから
窓の向こうの旅人だから

窓

http://p.booklog.jp/book/79230

著者：南海部　覚悟
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/79230

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/79230

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ